



はじめに

本を作る、と言うのは私にとってずっと昔からの夢でした。

本については折々にいろんなことを考えて来ましたが、なかなか思い切って実行に移せない部分もありました。

パブーを知ったのは雑誌の記事でしたが、その時の私の気持ちはちょっとうまく説明できません。

もう胸がいっぱいで、ゴムボールみたいに思い切り弾んでどこかに飛んで行っちゃいそうぐらい興奮しました。

ここでは「本を作る」ということについて自由に書いてみたいと思っています。

お気軽にコメントいただけると嬉しいです。

作者

始まりは短歌から

この本については思ったことをつれづれに綴りその都度公開したいと思っているので、ブログのような位置づけになるかもしれません。どうぞよろしくお願いします。

さて、パブーを利用されている方はみなそれぞれに「本を作る」ことについての思いをお持ちだろうと思うので、みなさんにその気持ちを聞いてみたいなあと思います。コメントでお話していただけると嬉しいのですが、まずは自分のことについて書いてみましょう。

私は現在詩や短文を主に書いています。しばらく描いていないのですが、イラストも少し描くことがあります。それからデジカメで写真を撮るのも好きです。いつの頃からか自分で書いた詩や短文と、絵や写真を組み合わせた本が出したいと思うようになりました。さかのぼって考えると、創作をし始めたのは高校生の頃でした。ちょうどその頃、歌人である俵万智さんが「サラダ記念日」で鮮烈なデビューを飾り、そのことに関連があるかどうか分かりませんが授業で「短歌を作る」という課題があったのです。その時詠んだ歌は次のものでした。

自転車で光の中を風受けてあなたを想うその瞬間（とき）が好き

国語の先生が生徒の歌を地元の小さな短歌コンクールに応募したらしく、私の歌も佳作か何かの賞に選んでいただきました。

当時はとてもシャイな田舎の高校生だったので、恋の歌が短歌の会の会報のようなものに載って人目に触れると聞いて本当に恥ずかしかったです。特に親に知られるのが照れくさくてなかったことにしたいぐらいでした。実際あの時に恋をしていたかどうかは忘れてしまいましたが、当時は自転車通学をしていて、道路より少し高い位置にある神社の境内の大いちょうが道路側に豊かな葉を広げる下スピードを上げて走って行くのが好きでした。

そこを走り抜ける時の気持ちに恋の想いを乗せて歌に詠んでみたのです。

授業で短歌を詠んだことでそのおもしろさに目覚めどんどん歌を作って行きました。

その頃の歌は今でもとってあるはずですが、なぜか学校を卒業する時などにみんなに書いてもらう「サイン帳」を短歌用のノートに使っていました。小さいサイズでリングで閉じるようになっていて横長、紙の色はピンクでした。大分昔の話ですが、結構覚えているものですね。

そして、自由に広がる言葉へ

短歌をたくさん詠んでいて思ったのは文字制限があることの難しさでした。もちろん短歌のおもしろさはそこにあると思うのですが、私がしたい表現にとってはその制約が結構障害になると言うか、散文のように自由に書いていく方が自分に合っているなと思ったのです。そうして私は口語自由詩（って言うんでしょうか）を書くようになって行きました。

詩を書くおもしろさに目覚めてからはノートを持ち歩き、電車の中でも喫茶店でも自宅のキッチンでもひらめいた場所でどんどん書いて行きました。当時は携帯なんてものはまだ一般的じゃなくて、電子的にメモをするという選択はなかったのです。その時のノートは結構な数で今も手元にあります。

埃をかぶっていたりもしますが、その後数回の引越しの際にも必ず大切に連れて行きました。内容は詩、走り書き、随筆のようなものなど色々です。その頃にはもう短歌を書くことはなくなっていました。今でも短歌や俳句を読むのは好きなのですが、自分で作ることはなくなりましたね。

詩を書き始めてからもう20年ぐらいの月日が経ちました。途中長いブランクがあったり、ノートを持ち歩かない期間がずーっと続いたりもしましたが、気持ちとしてはいつもふわふわと近くにありました。ものを考える時にもフレーズとして捉えると言うか、言葉で言うと分かりにくくなっちゃうんですが、例えば月のきれいな夜道を歩いていたとして月がきれいだなあ→同じ空の下で誰かもこの月を見ているかもしれない

→「同じ月を／あなたも見てるかな」

と心の中で遠くの恋人に向かって思うような言葉に、進化と言うか変換と言うか深化？させて行きます。この一編のフレーズが私にとっての詩になるわけですが、解釈は読んだ人に委ねたいと思っています。

「あなた」は別れた恋人かもしれないし、遠距離恋愛中の恋人、もしくは片思いだけけど好きな人かもしれないし、もう2度と会えない大切な誰かかもしれない。「あなた」を誰と特定しないことで読む人の心に自由に寄り添って欲しいと言うか、想像の余地を残したいという感じです。私は余白が好きなのです。

こういう風に参加を書く私にとって、口語自由詩はとても自由度が高くてぴったりの表現方法に思えました。考えてみれば、確か小学校の文集に「将来の夢：コピーライター」

「イラストレーター」と書いたことがあるので、昔から言葉や絵の力を信じていたと言うか好きだったんですね。「コピー」ってところにフレーズ的な短文が好きとかそういう嗜好が現われているような気がします。同じ表現でも「小説家」とか「漫画家」という風には思いませんでした。私が本を書きたい理由はもうひとつ大きなものがあるのですが、それはまた機会があったらお話ししますね。

長く考えて来て分かったことは（私は何でも長く考えるクセがあるのです）、自分は作品を書いたら誰かに読んでもらいたいんだな、ということでした。そんなの当たり前と思われるかもしれませんが、まずここで「どうしたい」と言うのが分かれるような気がするんですよ。ノートや鍵のついた日記帳に書く。中身は誰にも見せたくないって人だっていると思うんです。私の場合はまず好きだから書いてるわけですが、その先に誰かに見て欲しい、できることなら誰かの心に届いて欲しいという気持ちがあったわけです。その気持ちはとても強いものでした。

二十歳を過ぎた女性が恋の詩を他の人に見せたい、って変わった感じがするかもしれませんが、ここでまた私の表現の特徴が出て来ます。私が作品を書く時は自分の実体験がベースになっていることも多いのですが、「好きな感じ」を想像したり、何かまったく別のものからインスピレーションを得て書くこともたくさんあります。「今日見上げた月が円かった」ってだけでいくつか書けそうな気もします（気がするだけかもしれない）。えーと、何が言いたいかと言うとすべてが自分自身の経験（実話）から出来ているわけではないということです。それに

基礎になるものが実体験であってもそれをそのまま作品に乗せるのではなくて（そうすることもあるけれど）、多くの場合、他の材料や気分や雰囲気と一緒にスープ鍋に入れてコトコト煮込んでアクを少し取ってからお皿に注ぐみたいな感じなんです。一言で言うと「昇華」かなと思うんですが、ごちゃごちゃしたものや生の感情は一旦「私」というフィルターを通して適度に漉してから表に出すのです。この漉し加減がまた重要でやり過ぎると水とたいして変わらないものが出来てしまうかもしれません。

まあそのような感じで「私の作品であって、私そのものではない」と言いましょうか...絞りたてのフレッシュ・ジュースじゃなくて加工を加えているんです。ですから人目に触れても恥ずかしくない。（恥ずかしい作品もあるかもしれないけど）...と、私の文章は煮え切りが悪くてすみません。ああでもない、こうでもないと考えながら日々生きているものですからご容赦ください。

話を戻します。

私の作品は間違いなく私から出てきたもので一心同体である。

でもその作品は生のままではなくて昇華し蒸留した結晶（のようなもの）である。

このように理解して欲しい、と機会があれば言っていますが周りはそうは見ないようです。

でもそれはそうかなとも思います。私が書いたものがあれば、イコール私の考えであり私の体験と周りが見てもちっとも不思議じゃないです。ですから私の方が独特なのかもしれません。

そんなわけで私は作品を見せたくて仕方なかったわけですが、思い出してみれば18歳で東京へ出て来て最初に暮らした寮では、脚本家を目指すとても仲のいい友達がいたのでその人に読んでもらっていました。その人には内容についての意見はほとんど言われませんでした。が、「点（読点）が多い」とか率直に指摘してもらったためになりました。句読点は今でも難しいとっていてどこに打てばいいかよく考えながら書いています。

その後私は就職し寮を出て一人暮らしを始めるわけですが、今度は職場で知り合った同い年の友達や後輩や先輩に読んでもらってました。当時はインターネットも今のようには普及してないですし、日記やブログで発表するなんて選択肢はなかったわけですから隔世の感があります。いい時代になりました。

今思えば職場の人も困惑していたかもしれません。それを思うと結構恥ずかしいです。若気の至りと言うか、...でもそうまでしてもやっぱり誰かに見てもらいたかったんです。アナログで作品を発表できたり好きな人同士語り合える場もあるにはあったんですかね。ちょっと分かりませんが、サークル的なものとか創作系の雑誌とか？そういうものがあるかもしれないということさえ思いつきませんでした。

友達の反応ですが、1人は当時彼女が好きだった「ドリカムの歌詞みたい...」と感動して彼氏に見せてくれたりしたようです。後輩はハッキリとは言いませんがちょっと茶化した感じに感じていたようです（軽くからかわれたことがあるので）。

1つ忘れられない反応があるのですが、いくつか年上の女性に思い切りバカにされたことがあります。「詩を書くなんて頭がおかしい」と言うような反応でした。「えー!? こんな書いてて大丈夫??」とキワモノを見るような目で見られ、すごく悲しかったです。あれからとても長い月日が流れたのにその女性の表情、目つき、口ぶりなどは今でもまぶたの裏に焼きついています。

まあ偏見っていつの世にもあるものですし、「詩を書いている」と言うだけで「おかしい」と反応する人もいるかもしれないなあ...とは思いますが、正直ちょっときつかったですね。でも「職場の人に見せる」と言うのはある意味チャレンジですし、そういうものに興味がある人ばかりじゃないし、正直な反応だったんだらうな（と思うしかない）と思います。

「誰にでも見せる」と言うのはそういうリスクも受け入れるということなのかもしれません。その点ネットだと興味がない人が目にするのももちろんあるでしょうが、大抵は関心がないければひと目見て通り過ぎると思うのでお互いのためにはいいんでしょうか。結局

「趣味・嗜好」の世界になって来ると住み分けるんですかね。それでいいかなと思います。作品として世にさらし批評も甘んじて受けるのだとまた変わって来るでしょうけど。当時、読者探しは大変だったなーと振り返ってみて思います。

そして絵も描いてみた～もっと見てもらえる方法は？

私が初めてパソコンを買ったのは就職してからで、機種はMacintoshでした。キッドピクスという子供用のお絵かきソフトを使用してマウスで絵を描いていました。描きはじめるとおもしろくなりタブレットを買って描くようになりました。その絵を前述の詩と併せて職場の人にを見せていました。

描いていたものは色とりどりの猫とか、空を飛ぶプリンとか、ぽわんとしたキリンとか、黄身が2つある目玉焼きとかそんなものです。はっきりした色使いで、描いていてとても楽しかったです。すごいねえ、上手だねとほめてもらいましたが、身近な人なので本当のところは分からないですね。母に見せたら「もったいないからどこかに売り込んだら」と言われましたが、今思うとそれ程のものでもないです... (笑)

その他にはりすを飼い始めたので、りすが主役の4コマ漫画を作って見せたりしていました。この漫画は確かとてもおもしろかったはずなのですが、多分もう手元に残っていないような気がします。「特に興味がない人」の抵抗感から行くとイラストや絵は一番低いですかね。世の中にあふれてますし、恋が主なテーマとかそんなことはなかったですし。

でも興味がないものを見せられるだけで苦痛に感じるとか、それが職場の人だと余計、なんてこともあるかもしれないので一概には言えませんね。褒めなきゃいけないとか感想を言わなくちゃとプレッシャーに感じる人もいるかもしれないです。

そんな日々を送っていた私ですが、何かの賞に応募しようかなとか自費出版しようかなと考えたこともあります。この辺りも他の方に聞いてみたいところですが、ご自分で作品を作られている方ってこうやって考える人多いのでしょうか？しばらく前から自分史ブームがあるそうで、自分史を作られる方は自費出版して友人・知人に配るということを考えるような気がします。趣味で絵を描いたり俳句を作ったりしている方は画集、句集を自費出版したいと思ったりするのかな。うーん、これもほんとに人それぞれかもしれませんね。私の場合、まず賞の方ですが色々な公募情報を紹介した本を定期的にかけていた時期がありました。じっくり眺めていましたが、出ているのはキャラクター募集とかキャッチコピーとかそういうものがほとんどで文学賞みたいなものはあまり出ていませんでした。小説は時々あるので小説を書いているんだったらよかったなと思ったこともあります。書こうかなとチラッと頭をかすめましたが、プロットを考えてみても何も浮かびませんでした。もともと小説を書きたいわけじゃなくて不純な動機で考えただけなので当たり前といえば当たり前ですね。

次に自費出版の方ですが、こちらは割と本格的に考えたことがあります。私が買っていた公募情報誌にそれはもうたくさんの自費出版の広告が出てまして、「本にするための原稿を探しています」と言うようなそそられるキャッチコピーがっていました。

どうなんだろうーと迷い続けること数ヶ月間、私はついにそれまで書いた詩をワープロ打ちして印刷し順番も熟考して並べたものを自費出版の会社に送ってみました。

割とすぐに返事が来て、そこには手書きの手紙が添えられこんなことが書いてありました。

あなたの原稿を拝読した。とても素晴らしいもので是非とも本にしたいと思っている。当社では企画会議を行い流通に乗せる冊数を検討した上で、1. 全ての費用を当社持ちで出版する 2. 当社と著者で費用を折半する 3. 全ての費用を著者持ちとする の3つに分類しているが、あなたの原稿はとても優れたもので、ただ文学作品というジャンルの都合上最初からそんなに多くの冊数は刷れないと思っている。ついては2の共同出版方式を採らせていただきたいが如何か。本当に素晴らしい原稿なので前向きにご検討いただきたい。我が社も力になりたいと思っているし、編集者である私が最大限努力させていただきます。 ○○○○（名前）

この返事を見て私は天にも昇る心持ちだった。「全部自分持ち」という結論もある中で、「ベストセラーが見込め全額出版社持ち」ではなかったものの作品を評価してくれて「共同出版」と言ってくれた！出そうかなあ...と真剣に考えた。この話を聞いた母も嬉しそうで、出してみたらと言っていたように記憶している。ただし、出版部数が数百点で多かった（そのうち結構な冊数が作家に送られて来るんだと思う）こと、出資金が折半と言ってもかなり高額だったことで迷って、しばらくの間ずーっと迷っていたけどそのままになってしまった。その間出版社から営業があったかどうかは忘れてしまった。このことがあってからずっとずっと長い月日が流れたある日、自費出版の会社が倒産したことを知った。確か私が原稿を送ったあの会社だと思う。原稿を送ってきた人に対して詐欺的な勧誘を行ったという記述を見てびっくりした私はちょっと調べてみた。すると「詐欺に合った」と言う人の記録したものが出来て来て、まあ当事者じゃないので確かなことは分からないけど、私が出版社からもらって舞い上がるようだったあの言葉とそっくりのことを言われ実際に出版したという話だった。その人の話に寄れば、全国数百だったかの書店の店頭には並びどうのこうの...と言う説明だったが実際そんなことはなく、約束した営業活動はほとんど行われなかったとのことだった。他にもひどい話がたくさん出ていた。あの時の評価をどこかで嬉しい記憶として大事に思っていた私はそれを見て心底残念だった。商売のために人の純粋な気持ちを利用して踏みにじっていたのが本当だとしたら、こんなにひどい話はないと思う。犯罪ってどんな犯罪も許せないけど、詐欺って本当に心から嫌だなと思う。許せない。